

特集 文学と文学学

——文学学会第二回シンポジウム「これからの文学学(Ⅱ)」をめぐって——

シンポジウム開催に至る経緯と議論の展開

松本亮三

一九八九年一月二九日、松前記念館地下講堂において、文学学会第八回大会が開催され、この時「これからの文学学(Ⅱ)」と題するシンポジウムが行われた。東海大学の文学学は、どうあるべきかという問いとともに、文学学をいかに位置づけるかという、さらに根本的な問いは、文学学が創設され、やがて文学学会が誕生するという過程の中で、さまざまな形で論議されてきた積年のものであったようだが、一九八九年を迎えるとともに、公の場で徹底した討論を行おうという気運が高まってきた。このような動向の発露は、松本富士男教授(西欧課程)を中心とするシンポジウム開催の呼び掛けとなり、まず、一九八九年四月、文学学会例会において、大学院学生および修了者によって予備的なシンポジウムが行われる運びとなった。パネリストは浅見聡、中川久嗣、中野雅之であった(いずれも本学大学院修了者。以下本稿

の記述において、氏名を列挙する場合はすべて発表者順または学会報告記載順とし、敬称も省略した。なお、身分は原則として当時のものである。関係者各位のご了承を賜りたい。これを受けて、五月二九日には、「これからの文学学」と題するシンポジウムが、松本富士男の司会・進行の下、松前記念館地下講堂で開催されたが、これは本学会が初めて主催したシンポジウムであった。この第一回シンポジウムでは、杉山文彦(東アジア課程助教授、松本亮三(西欧課程助教授)、田崎篤朗(大学院修了)がパネリストとして基調報告をし、原田敏治(日本課程教授)と小松久男(西アジア課程助教授)がコメントを行った。各パネリストの発表内容は『文明研究』8号に掲載された。また最近では、松本富士男と石原綱成(大学院修了、研修員)が、『比較文学学会報』一四号(一九九〇年一〇月)誌上に「東海大学文学会の歩み」

を著わし、ここでもその概要が紹介されている。

三名のパネリストの共通した見解は、文明学は、現代文明が提示する諸問題（たとえば、環境破壊やエネルギー問題）に対する認識、あるいはそれに伴って生ずる危機意識を前提として成立したものであり、文明学と文学科においては学際的ないしは総合的な視点で文明が認識され、かつその究明がなされなければならないとするものであった。しかし、各自の学問的焦点は、自ずから異なった所に設定されていた。杉山は、現代文明の諸問題がアジアにおいて先鋭化するという認識の下に、アジア諸文明の構造と、アジアと西欧近代の關係性を解明すべきことを主張し、松本亮三は、文明学の基本的コンセンサスを形成するために、これまでの文明観の変遷を整理し、さらに、現代文明に対処できる「力ある知」を形作るために、「未開」とさまざまな「文明」に対する積極的認識が必要であると説いた。一方、田崎の報告は、本学で学んだ者としての視点から、文学科に対する具体的な提言へと収斂し、多様な研究方法を取り入れるために学科設置科目にこだわらない自由な履修と、卒業論文や修士論文における共同研究を認める柔軟なカリキュラムの必要性を提言した。

この初めての試みは、学生と教員に、それぞれ立場上の相違はあるものの、ややもすれば制度という「建前」の下で看過され、不問に付されがちな問題を顕在化させ、これを討議する環境を用意したという点で、あるいは、少なくともも討議する場があることを認識させた点で、きわめて有意義であったと言えよう。シンポ

ジウムに出席した学生に対して行われたアンケートが、時を経ずに大学院学生の手によって整理されている。これを見ると、通常の「個別的」な授業を越えた所で、文明と文学科に対する理解の糸口をつかみ、かつ現在のカリキュラムに対する批判的認識が醸成されたことが窺える。

このような自省的反応は、学生だけのものではなかった。七月一〇日には、シンポジウムの約一箇月後にあたる六月二四日に行われた恒例の「秀作卒論発表会」の反省をかねた会合がもたれ、文明学と文学科に関する非公開シンポジウムが、教員によって同じ場で、行われている。参加者は、齋藤博（文明学会会長、西欧課程教授）、松本富士男、原田敏治、菟原卓（西アジア課程助教授）、竹下政孝（西アジア課程助教授）、久保田忠利（西欧課程助教授）、加藤和秀（西アジア課程教授）、小松久男、渡瀬信之（南アジア課程教授）、正信公章（南アジア課程専任講師）、田尻祐一郎（日本課程助教授）、古家信平（日本課程助教授）であった。

筆者は第一回シンポジウム開催直後から同年一月始めまで海外出張しており参加できなかったが、この会合の報告書を見ると、個別（地域研究）と一般（理論研究）を両輪とする文明学研究と教育の必要性が話し合われたことが分かる。

「これからの文学科（Ⅱ）」と題する二度目の公開シンポジウムが開催された背景には、このような経緯があったのである。第二回シンポジウムには、齋藤博、松本富士男、渡瀬信之、浅見聰がパネリストとして基調報告をし、これに対して、藤盛美郎（東

欧課程助教授)、菟原卓、古家信平がコメントを行い、松本亮三が司会・進行の役を務めた。

第二回シンポジウムの基調報告も、パネリストそれぞれの多様な興味と学問的焦点に従って行われ、また、これに対するコメントや質問もさまざまな角度からなされた。総じて活発な議論が展開されたと言える。各報告の詳細は、以下、各パネリスト自身の論文が掲載されるのでそれによるとして、ここでは、全体的な議論の展開とまとめを、司会者の私見を交えながら概観していきたい。

すでに第一回シンポジウムの時から問題となってきたことではあるが、「これからの文明学科」という議題には、密接に関連するが方向性の異なった二つの論議が含まれている。ひとつは、文明学をいかに認識し、これをいかに発展させるかという論議であり、いまひとつは文明学科のカリキュラムについての省察と、その再構築に関わる議論である。この二つは、藤がコメントした通り、学会の問題と学科(大学運営)の問題であり、峻別されるべきであろう。とは言え、これらは、研究と教育の問題と言い換えることもできるものであり、自ずから関連性を有していることもまた事実である。この種の双歧性は、文明学科に関する議論がまだ初期の段階を脱していない状況では、やむを得ないというより、必要なことなのかもしれない。

このように、本シンポジウムでは種々の異なった視点と提言が展開されたが、これらは、パネリストと参加者の問題意識をもとに以下の四つの分野にまとめられることができるように思われる。

一 文明学の成立契機と課題(文明学には何が問われているか)
二 文明の概念(文明に何を意味させるのか)

三 文明学の確立とその方法(文明をいかにして研究するか)
四 文明学科の在り方(教師・学生が何を行なうか)

論点を細分することはいくらでも可能だが、現時点では実質的にこの四点を区分するだけで十分であろう。発表後の質疑応答も司会者の提案に従って、この四点に即して行われた。

第一の点に関しては、前回と同様の議論が展開された。すなわち、文明学は、現代文明の危機への対応として成立したもので、ないしは成立しうるものであり、これに応えなければならぬ、あるいは応えることができるかもしれないという認識は、パネリスト全員に共通したものであったように思われる。この認識が、齋藤報告において二重の意味をもっていたことは重要である。すなわち、実際の社会||文化現象として頭わになった諸問題、言い換えれば人類の営為の直截の結果として起った諸問題とともに、近代諸学が袋小路に陥ってその適応性を狭め、いわば「コアラ化」したという、学的営為の問題をも提起しているからである。コメントーターの菟原は、一般に言われるこのような危機を、個人がどれだけ体感できるのかという疑問を呈した。菟原の指摘は個人と社会(文化)の位置付けや、さらには、個々の現実的問題に対して、これまで追認的な形でしかなされなかつた学的提言への批判として真摯に考えなければならぬ。おそらく、文明学が行なう問いかけと、様々な形で生ずるのであろうそのテーゼは、システ

ムとしての文明を意識しながら、あるいはそのような意識をもつことなく、「文明」の中に投げ出されている「個」をも、いずれ問題としなければならぬだろうと考えられるからである。

第二の文明の概念に関しても、その扱いは決して一樣ではない。おそらく文明を論ずるときに生ずる最大の問題は、文明をいかなるものとして捉えるかに関するコンセンサスができていないことではないかと思われる。渡瀬報告が示したように、「手垢のついた」文明概念を拒否し、諸問題を、人類の文化と社会が包含する要素と関係に還元するのも一つの見識であろう。その対極には、松本亮三が第一回シンポジウムで意図したような「妥協的な」総合があらう。松本亮三は、文明の社会・歴史的通念を尊重しながらコンセンサスを捜すことに特にその努力を傾注したが、これも意味無しとはしえまい。齋藤が言う、プロセスとしての *civilization* と、理念としての *civility* の位置付けも、あるいは、浅見が言う個別的文明と、理論的に総合しうる一般的命題としての文明との区別も、また、上記の第四の領野とも関係することだが、松本富士男が、文明とは学科概念か学部概念かと問いつけた根底にも、「文明」という概念のもつ鳩的な性格にいかに対処すべきかという苦慮が表れている。

文明とは、現象としても概念としても、本来多義的であり、一面的な規定をすべて拒否してしまうものかもしれない。このような多義性が文明の本質であると言えるのかもしれない。「文明」が本来もっている、この豊饒過ぎると言えるほどの多義性が、わ

れわれを翻弄し、かつ、コンセンサス確立の可能性を哄笑しているようにも見える。

第三の点についても第二点と関連しており、余りにも多様な側面を示す「文明」に対して、われわれがいかに関与してきているかを提示することしかできない。おそらく、個別的文明研究と総合的文明研究の積み重ねが文明研究の場を提供するであろうし（渡瀬報告）、これは、より具体的には、地域研究とそれらの総合化として実を結ぶ（松本富士男報告）であらうことは予期できる。さらに、文明学は、単なる既成諸学の総合としては、実現することも理解することもできないであろう。文明学ないしは文明理論を、それがたとえ近代の既成諸学とは知的構成を異にするものではあれ、「学」として成立させるべき努力は、「学」の意図するところが何であらうともなされなければならないと思われる。

文明学の拠って立つべき知的地平の構築とでも言えるような、真に基礎的な営みが、いわば学問の基盤整備がなされつつあることは、齋藤報告に見るように明らかであり、諸学の学的営為自体を対象とする学としての文明理論を主張する浅見報告が意図しているのも、同じような学問の基礎の構築にあると考えられよう。文明学はまだ播籃の中にあるが、播籃から立ち出て一人立ちしようとする準備は、このように、整えられつつあると理解してよいだろう。

第四の点は、教師の学問活動と学生の教育課程に直接関係のある問題である。この問題は、最も現実的であるために、提言し易

いと思われがちだが、実は、論議する上でも、またその実行という面でも、最も難しい問題である。本シンポジウムにおいては、松本富士男報告が文明学科の歴史的展開をふまえて、この問題に真正面から取り組んでいる。他の三名のパネリストもこの点に少なからず言及しているが、特に、コメンテーターの古家が、都市民俗学の研究を解説しながら、学際的で総合的な研究・教育への転換が起っていることを説いたのは、松本富士男報告と並んで示唆的であった。この領野での議論を総合すれば、文明学は、いまやカリスマ的個人の「机上」研究ではなしえず、また、個別研究の単なる総合でもなしえないこと、有機的な共同研究と教育のプロジェクトが必要であることが、参加者の合意であると見てよいであろう。

しかし、文明の共同研究・教育とは、何をテーマとし、どのように運営されるべきものであろうか。このような具体的な問題は、文明をどう考えるか、さらには、どのようにこの学問を位置づけるかという問題へと必然的に帰着する。いわばこの種の自家撞着的な円環からいかにして脱却するかが、文明学と文明学科に、まず解決すべきものとして与えられた課題であるのかもしれない。

文明学に対しては、本学内外でさまざまな提言がなされてきた。文明概念のコンセンサス樹立（あるいは放棄）、個別研究と総合的研究の調和、多様な文明に関する認識、文明学の定位など、「題目」はいくらでも唱えられるだろうし、また唱えることは易しい。しかし、これを——研究者あるいは学生個人として、また、

文明学科ないしは文明学会という集合として——どう実現するか。このあたりに、まだ議論しなければならない問題があるように見受けられる。これは、司会者自身の自省的な考察でもある。